

【今日の説教から】

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」これが復活の主のメッセージでした。主は今日も生きておられます。しかし私たちは、主を目前にしながらいつもまるで主が墓の中にいるかのように失望して、胸は霧に閉ざされ、目が、心が固く閉じているのです。

このエマオの途上の出来事は大変滑稽です。イエス様が目の前におられるのに、彼らはそうとも気付かずにイエス様はどこに行ってしまったのかとお話ししているのです。フットプリント(足あと)という賛美が思い出されます。

「主と私で歩いてきたこの道 足あとは二人分 でもいつの間にか一人分だけ 消えてなくなっていた 主よ、あなたはどこへ行ってしまったのですか 私はここにいるあなたを背負って歩いてきたのだ あなたは何も恐れなくてよい 私が共にいるから」

私たちは、「わたしたちと一緒に泊まり下さい、私たちと共に人生を過ごしてください、主よ」と願いますが、主は元から私たちと共にいてくださったのです。私たちは愚かで心鈍く、主が語られた大切な御言葉をすぐに忘れてしまいます。しかしその御言葉こそが私たちの目を開く鍵です。「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」と語られたように、御言葉こそが私たちの人生を照らす光です。

皆様おはようございます。4月になり、桜満開の素晴らしい季節となりました。

先週私たちは主の復活をお祝いいたしました。しかし主の復活の朝は、その輝かしい勝利には不釣り合いの人々の反応がありました。

勝利の空の墓は女性たちにとって困惑をもたらすものでした。勝利を告知らせる天使には驚愕し、弟子たちには愚かなたわごとのように信じてはもらえませんでした。勝利の朝は困惑の朝でした。

そしてその日のこと。どういうわけか話題の渦中であるエルサレムからおよそ11キロメートル離れたエマオという小さな村へと歩を進める二人の弟子がいました。その一人の名はクレオパ、もう一人の名は記してありません。

24:13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、

24:14 このいきさつの出来事について互に語り合っていた。

24:15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

彼らは数時間の旅路の間、互いに今日エルサレムで起こったことはどういうことかと語り合い、論じ合っていました。

韓国の教会は祈りの教会、台湾の教会は歌う教会、そしてアフリカの教会は踊り賛美する教会…、日本の教会は会議する教会などと言われます。私はアメリカの留学中、出会った同い年、20歳のクリスチャンたちが会話の端々に聖書の御言葉を織り交ぜているのを大変感銘深く聞きました。話し合うことは大切なことですが、話すより論ずるより、ひと時その手を止めて、御言葉に戻り、祈り、思いを神様に向けて語り、賛美するということの素晴らしさを思います。

彼らはイエス様がない、イエス様のお体が見当たらなくなったと騒いでいましたが、その彼らと共にほかならぬイエス様がぴったりと共におられるということに深く感銘を受けます。

私たちの日々もこうなのではないでしょうか。あの不可解なこと、この悩み事、困惑。戸惑い。途方に暮れて立ち止まること。主がどこか遠くへ行ってしまったように思うとき。そして悩み、論じ合うとき。孤独で見捨てられたと思うとき。しかしそう思って心乱しているのは私たちだけの問題であって、私たちは見捨てられてはおらず、主がそんな私たちにぴったりと寄り添っておられる。これが私たちが今日知るべきことなのではないでしょうか。

24:16 しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。

24:17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。

24:18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

神様は私たちの間で起こっている問題ごとを分かっておられるのか。知って理解して、どうにかしなければならぬことを自覚しておられるのか。こんな神様に対して不遜極まりないことを、時に私たちは真剣に考えています。

私たちの目はさえぎられていて、現実的なことばかりに目が行って、失望し、絶望し、そこに、目の前におられる主のことに気が付かないほどなのです。

そして主は全てご存じでおられるにもかかわらず、私たちがどんなことで悩んでいるのかを聞き出されます。彼らは悲しそうに立ち止まって言います。

「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

あなたはエルサレムに居ながら、皆が知っていることすら知らないとは、どういうことなのですか、エルサレムに居ながら、あなたのように物事を知らない人など他にはいませんよ。

「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか」。
どうして神様はこの世界で起こっていることに無関心で、ただお一人、我関せずでおられるのか。遠き天の高みにおられ、私たちのことなど何にも知らず、関心も持たれないのではな
いか。こういう、神様に対する深刻な疑義を私たち人間は持ち合わせているのではないでし
ょうか。ですからこの地上に信仰が見られなくなってしまうのではないのでしょうか。

しかしその考えは完全に見当違いです。
ここにイエス様は、弟子たちと共に立っておられ、共に彼らの人生と共に歩まれ、彼らの語
りを聞き、ため息を聞き、悩みに耳を傾け、そうと知られなくても神様は私たち人間と共に
おられ、私たちのうめきと嘆きを忍耐強く聞き、受け止め、そしてその身にすべての煩いを
引き受けて身代わりの死を遂げて復活してくださったのです。
私たちは神様を、そういう日々身近なお方であると知っているのでしょうか。私たちの人生の
歩みに伴い、そして時が来るまで何も言わず、ご自分の姿をほのめかすこともせず、ただじ
っと私たちの苦悩の声、御言葉を忘れて勝手に主から離れて悩みを背負い込んでいる私た
ちに耳を傾けていてくださるのです。

24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのこと
です。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、
24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。
24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。
しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。

「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも
力ある預言者でしたが、
24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。
24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。

望みをかけていましたが、あてにならないお方ようです。あんなに力を振るっていたのに、亡くなってもう3日。あんなに偉大な方が、どうしてみすみす祭司長たちの手にかかって、何の抵抗もできずに敗れ去ってしまったのでしょうか。わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていたのに・・・。

24:22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、

24:23 イエスのからだが見当らないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。

24:24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行ってみますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。

その上に変なことが起こるのです。数人の女性たちが言うことがまた、てんで分からないのです。イエス様のお体が見つからないばかりか、天使が出てきて「イエスは生きておられる」というのです。実際はカニ何人か行ってみると、その通り遺体は見つかりませんでした。何という由々しきこと、何という理解できないヘンテコな現実なのでしょうか。

24:25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。

24:26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。

24:27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。

私たちは愚かで無知で、信じるに本当に遅い心根を持っています。すべて預言者たちが神様からお言葉を預かって、神様のお言葉が語られているというのに。本当にそれに対して無知で愚かで信じるに遅い鈍い者なのです。

時のしるしを察知することもできず、イエス様が語られていた大切なことも忘れ、預言者全体がイエス様について語っていることをも理解せず、御言葉を離れておろおろしています。

「キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。

キリストにとって苦難は切っても切れないことでした。それは私たちのためにお受けになられた苦難でした。イエス様が十字架にかかって死なれ、復活するということ。私たちの罪

とがを負って死に、身代わりの死を遂げ、私たちを救うのはまさにこのお方であるということ
を私たちは骨身にしみて理解しているのでしょうか。それともいまだ目が閉ざされて恐怖
と混沌と悩みの中にいるのでしょうか。

24:28 それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる
様子であった。

24:29 そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮
になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいら
れた。

24:30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるう
ちに、

24:31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなく
なった。

24:32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったと
き、お互の心が内に燃えたではないか」。

弟子たちはイエス様から神様の御言葉を解き明かされるとき、困難の現実の中から主によ
り頼み、勝利を得ることができる確かな希望が注がれ、彼らの固く閉じられた心の目は、信
仰の目は開かれました。そして心が内に燃えたのです。赤々とした光に照らされ、明るく照
らされて、目がものを見ることが出来るようになったのです。

その恵みに触れ、彼らはイエス様とのお別れをしたくないと、まだ先に行こうとしておられ
るイエス様に願って足止めします。共にいてください。共に人生を過ごしてください。私た
ちにとってあなたが必要なのです。どうか一緒にいてください。イエス様は彼らと共に食
事の席に着かれ、いつものようにパンを祝福して祈られました。その祈りに、イエス様の祈
りを想起したのでしょうか。ハッと気づいた時には目の前のイエス様は見えなくなっていま
した。イエス様は彼らに、ご自分が共におられることに気づかせようとしておられました。
イエス様は目に見えなくてもいつも彼らと共にいることに気づかせようとなさいました。
ですからそれに気づいた彼らには、イエス様はそれ以上共にいる必要はありませんでした。
イエス様は見えなくなただけで、彼らと共にいつまでもおられ、そして私たちと共にい
つまでもおられます。

24:32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったと
き、お互の心が内に燃えたではないか」。

詩編 119:130 み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます。

119:131 わたしはあなたの戒めを慕うゆえに、口を広くあけてあえぎ求めました。

119:132 み名を愛する者に常にされるように、わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。

119:133 あなたの約束にしたがって、わが歩みを確かにし、すべての不義に支配されないようにしてください。

119:134 わたしを人のしえたげからあがなってください。そうすればわたしは、あなたのさとしを守ります。

119:135 み顔をしもべの上に照し、あなたの定めを教えてください。

119:105 あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。

119:106 わたしはあなたの正しいおきてを守ることを誓い、かつこれを実行しました。

119:107 わたしはいたく苦しみました。主よ、み言葉に従って、わたしを生かしてください。

119:108 主よ、わがさんびの供え物をうけて、あなたのおきてを教えてください。

119:109 わたしのいのちは常に危険にさらされています。しかし、わたしはあなたのおきてを忘れません。

119:110 悪しき者はわたしのためにわなを設けました。しかし、わたしはあなたのさとしから迷い出ません。

119:111 あなたのあかしはとこしえにわが嗣業です。まことに、そのあかしはわが心の喜びです。

119:112 わたしはあなたの定めを終りまで、とこしえに守ろうと心を傾けます。／サメク

119:113 わたしは二心の者を憎みます。しかしあなたのおきてを愛します。

119:114 あなたはわが隠れ場、わが盾です。わたしはみ言葉によって望みをいただきます。

24:33 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、

24:34 「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなされた」と言っていた。

24:35 そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した。

日が傾いて、もう休むべき時間になろうとしていたにもかかわらず、旅の疲れも物とせず、彼らはさっき進んだ11キロメートルの旅路を意気揚々と帰っていきます。どうしてそんなことになったのかと、途方に暮れた議論はもはやありません。御言葉の光に照らされ、復

活の主がいつまでもともに、人生の旅路に伴ってくださるといふ喜びをもって、復活の主を証しするために、彼らは心燃やされ、力をみなぎらせてキリスト者の交わりに出ていきます。

イザヤ 40:28 あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はどこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。

40:29 弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。

40:30 年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。

40:31 しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。

フットプリント(足あと)

「主と私で歩いてきたこの道 足あとは二人分 でもいつの間にか一人分だけ 消えてなくなっていた 主よ、あなたはどこへ行ってしまったのですか 私はここにいるあなたを背負って歩いてきたのだ あなたは何も恐れなくてよい 私が共にいるから」

あしあと

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。

暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。

ひとつはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。

このことがいつもわたしの心を乱していたので、

わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、

あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、

わたしと語り合ってくださいると約束されました。

それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、

ひとりのあしあとしかなかったのです。

いちばんあなたを必要としたときに、

あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、
わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。

わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。

ましてや、苦しみや試みの時に。

あしあとがひとつだったとき、

わたしはあなたを背負って歩いていた。」

FOOTPRINTS

One night I dreamed a dream.

I was walking along the beach with my Lord.

Across the dark sky flashed scenes from my life.

For each scene, I noticed two sets of footprints in the sand,

one belonging to me

and one to my Lord.

When the last scene of my life shot before me

I looked back at the footprints in the sand.

There was only one set of footprints.

I realized that this was at the lowest and saddest times in my life.

This always bothered me and I questioned the Lord about my dilemma.

"Lord, you told me when I decided to follow You,

You would walk and talk with me all the way.

But I'm aware that during the most troublesome times of my life there is only one set of footprints.

I just don't understand why, when I needed You most,

You leave me."

He whispered, "My precious child,

I love you and will never leave you

never, ever, during your trials and testings.

When you saw only one set of footprints

it was then that I carried you."

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。復活の主が、途方に暮れ立ちつくす私たちといつも共におられ、御言葉を語りかけ、目を開き、心を燃やし、励まし、人生に光を灯して導いてくださいますからありがとうございます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン